

月下のマドンナ

宮崎和彦

あらずじ

就活に苦戦する大学生の本橋月奈（21）は新宿駅のホームから転落して50年前の1968年、国際反戦デーで暴動状態になっている新宿駅へとタイムスリップしてしまう。

全共闘学生の沖田茂（22）に助けられた月奈はストライキで封鎖された大学のバリケード内に連れて行かれ、そこで居候をすることになる。最初は立花敦子（21）ら全共闘学生の言動に戸惑う月奈だったが、敦子が沖田に恋をする普通の若者であることに気が付いたことから少しずつ彼らに打ち解けていく。ある日、月奈はうまくアジをできない沖田に対する罵声や投石に怒りを爆発させて思わず前に出てアジをしてしまう。するとそれが思いの他ウケて、月奈は運動の中心的存在であるマドンナへと変貌していく。

一方の沖田はケガでデモに参加できなくなったことから自分の存在意義に迷う。そして、年が明けた1月の神田解放区闘争で同年代の機動隊隊員を殺しかけたところを月奈に止められる。月奈は沖田が医者の家で生まれ、将来は医者になることを義務づけられていることを知る。二人は将来自分が何になりたいのかを見つけられてないことに悩む。

そんな折、月奈と沖田は何者かに襲われる。その黒幕が目立つ月奈に嫉妬した綿引京子（23）であると突き止めた月奈は京子を懲らしめた後、沖田の腕の中で消えていった。

現代に戻った月奈。相変わらず就活に苦戦していると、偶然知り合った沖田の孫の北村咲良（23）から、沖田が亡くなる直前までタイムスリップの研究をしていたことを聞く。月奈は沖田が月奈と出逢うために自分を過去に送ったのではと考え、思わず涙を流す。

月奈は沖田の妻になっていた敦子を訪ねると、バリケード内に沖田が書き残した落書きの写真を見せられる。「L奈 人類は月に行けたんだ。俺たちだって何にでもなれる」。月を見上げた月奈は思わず微笑むのであった。

人物

本橋月奈^{るな}（21）大学生
沖田茂（22）全共闘学生
立花敦子（21）（71）全共闘学生
綿引京子（23）（73）全共闘学生
丸山優（20）全共闘学生
本庄博子（21）全共闘学生
北村咲良（23）雑誌記者
葛城明（21）警視庁機動隊員
猪野克成（25）全共闘学生
高部修平（22）体育会学生
川波昭典（20）体育会学生
沖田徹（28）沖田の兄・医者
菊池莉子（21）大学生・月奈の友人
須藤美咲（21）大学生・月奈の友人
本木悠人（24）フリーター
日下翔（22）フリーター
水谷蓮（21）フリーター
佐伯次郎（50）京子の部下
吉川美羽（23）佐伯の部下
真野一雄（62）警備員
柴田宏幸（22）大学生
老人（72）
男1
男2
男3
機動隊員1
機動隊員2
機動隊員3
刑事1
刑事2

○一九六〇年代末の映像

シュプレヒコールと共にジグザグデモをする若者たち。

バリケードで封鎖された大学。

掲げられた「スト決行中」の横断幕。

アジをする学生。

ヘルメットにゲバ棒を持ち、機動隊とぶつかり合うデモ隊。

投擲されて燃える火炎瓶。

機動隊に連行される若者たち。

月奈M「何かにつけてゆとりだと揶揄される私たちの世代が生まれるずっと前。やれ安保だ、やれベトナムだと、この国の若者たちは何かにつけて怒りまくっていたらしい。学生運動、全共闘と言う言葉は耳にしたことくらいはあるが、彼らは何を指して、何をしていたのか？ そんなことは現代の就活に追われている私にとっては興味もないし、知るよしもなかった」

○メインタイトル

「月下のマドンナ」

○新宿駅西口（夜）

夜空に浮かぶ月。

T「2018年10月21日」

たくさんの人々が行き交っている。

○居酒屋（夜）

綺麗な内装の店内。

テーブルにはおしゃやかな料理が並んでいる。

不機嫌そうな本橋月奈（21）。

月奈の隣には菊池莉子（21）、須藤

美咲（21）。

月奈の向かい座る本木悠人（24）、

日下翔（22）、水谷蓮（21）。

本木「セミナーで知り合ったベンチャー系のCEOがさ、俺のビジョンにアグリーしてくれて。うまくいったらビッグプロジェクト

トにコミットするかもしれないくてさ」

興味のなさそうな女性陣。

莉子「へえ。どんなお仕事なんですか？」

本木「具体的なことはこれから」

莉子・美咲「はっ？」

本木「一番大事なのはビジョン。分かる？」

美咲「えっと、今お仕事は？」

本木「バイト。お金貯めてて」

女子三人「……」

本木「月奈さん、就活うまくいってないって

言ってたっけ？」

月奈「あつ、はい」

本木「それはつまりビジョンを持たないから

だ。分かる？ ビジョン」

月奈「はあ……」

「フツ」と鼻で笑う本木。

本木「君はいったい何になりたいんだ？」

月奈「えっ？ えっと……」

本木「ただ周りがそうするからって就活して

さ、何か自分の生きた痕跡をこの世界に残

したいと思わないのかい？」

月奈「いや。そんな大げさなことはしたくな

いんですけど」

本木「ダメダメ。リノベーションを起こして

自分がインフルエンサーにならないと。人

生に意味なんてないから」

日下「本木さん。それアグリー！」

本木「だろ？ イエーイ！」

乾杯する本木、日下、水谷。

あ然としている莉子、美咲。

月奈、グラスビールを一気に飲み干し

て店員を呼ぶ。

月奈「芋。ロックで」

○新宿駅・ホーム(夜)

電車を待つ人々。

月奈がベンチにぐったりと座っている。

介抱をしている莉子と美咲。

莉子「月奈。水飲む？」

月奈「う……」

美咲「それにしても、本当にいるんだね。意識高い系って」

莉子「ゴメンって。バイト先の男の子が起業家がいるって言うからつい。まさかただのフリーターだとは思わなくて」

美咲「目の前の女子を気にせず自分の話ばかりして最後は一円単位まで割り勘とは。遠くのビジョンより目先の事を考えろって」

莉子「だよね。てか私たちも目の前のことをどうにかしないと……」

うなだれている月奈。

美咲「寝てるわ」

莉子「置いていこうか」

美咲「そうね。就活落ちまくって落ち込んでたから誘ったけど、相手があれじゃ引き立って役にもならなかったわね」

笑いを堪える莉子と美咲。

美咲「月奈！ 私たちホーム違うからもう行くよ！」

莉子「これからも就活頑張つてね！」

笑いながら去っていく莉子と美咲。

月奈、大きくため息を漏らす。

老人（72）が月奈の前に立つ。

老人「席を譲りなさい！」

月奈「えっ？」

席が埋まっているベンチ。

他の人たちは関わらないようにと無視している。

老人「若い者が目上の人間を差し置いて席に座るな！ バカモン！」

月奈「すみません……」

渋々立ち上がる月奈。

老人が踏ん反り返るように座る。

老人「これだから最近の若い者は」

月奈「……」

月奈、ふと頭に激しい痛みを感じる。

月奈「うっ……」

ホームに入ってきて来る電車。

痛みにもがき苦しむ月奈。

足下がふらつき線路に落ちていく。

悲鳴を上げる乗客。

電車のライトに振り返る月奈。

目の前に迫る電車。

月奈「わあああ！」

固く目をつむる月奈。

光が月奈を包む。

○新宿駅・ホーム・1968年(夜)

うづくまって、目をつむっている月奈。

恐る恐る目を開けると、目の前に停止

した電車がある。

月奈「た、助かった……。ん？」

線路内を怒号と共に走っていく人々。

男1が電車の窓を角材で叩き割る。

月奈「ひゃあ！」

周りではヘルメットを被り、角材を持

った人々が駅や電車を破壊している。

呆然としている月奈。

男1が電車の上に乗って威勢を上げる。

男1「米タン進入を許すな！ 粉碎せよ！」

男1、架線に触れて感電し、月奈の前

に落ちてくる。

月奈「ぎやあああ！」

月奈、線路を走って逃げていく。

ホームでは電車内から剥がされた椅子

や線路の枕木が燃やされている。

「しんじゆく」と書かれた駅名標。

月奈「し、新宿？」

飛んできた石が月奈の体に当たる。

月奈「いつ！」

目の前の群衆が投石をしている。

月奈「なになになに！ わっ！」

石を必死にかわす月奈。

月奈の足下に催涙弾が転がってくる。

月奈「へっ？」

煙を上げる催涙弾。

もだえ苦しみ、涙と鼻水でグチャグチャ

の顔の月奈。

激しく嘔吐する。

月奈「何よこれ……」

さらに襲ってくる催涙ガスと投石。
月奈、慌てて逃げていく。

○新宿駅西口前（夜）

月奈が駅から出てくる。
激しく燃えている警察車両。
機動隊と対峙している群衆が「帰れ！
帰れ！」とシュプレヒコールをあげて
いる。

突撃してくる機動隊が次々と群衆を捕
らえていく。

呆然としている月奈。

機動隊員1が月奈の腕を掴み連行する。

月奈「警察？ た、助かった……」

月奈、安堵の表情。

月奈の隣で立花敦子（21）が機動隊
員2に捕まっている。

機動隊員2「学生か？」

敦子「が、学生です！ もうデモなんてしま
せんから！ どうか許してください！」

機動隊員2が敦子の顔面を警棒で殴る。

月奈「えっ？」

敦子の口から折れた歯が出てくる。

月奈「……」

機動隊員1「お前、学生か？」

月奈「い！ いやあ……」

機動隊員1「答えろ！」

警棒を振りかざす機動隊員1。

月奈「ひっ！」

沖田茂（22）がやってきて、機動隊
員2に跳び蹴りを食らわせる。

月奈「？」

機動隊員1「てめえ！」

沖田に掴みかかろうとする機動隊員1。
蹴り飛ばす沖田。

月奈の前に機動隊員1が倒れ込む。

月奈「ひゃあ！」

沖田、敦子の元へ。

沖田「敦子！ 大丈夫か？」

敦子「歯が折れた……」

沖田「ここは逃げるぞ！ 騒乱罪が適応された。もうデモどころじゃない！」

敦子「うん」

沖田「おい！ 手を貸せ！」

月奈「えっ？ 私？」

沖田「早くしろ！ パクられたいのか！」

月奈、慌てて沖田と共に敦子を抱えて逃げていく。

○路地裏（夜）

街灯の少ない道。

沖田が敦子を背負い走っている。

必死について行く月奈。

後方では炎が夜空を明るくしている。

沖田、敦子を降ろすと、民家裏の水場でハンカチを濡らす。

沖田「行くなって言ったのに、なんで行った。暴動になるって分かってただろ」

敦子「だって……」

沖田「口開けろ」

沖田、濡らしたハンカチを敦子の口に突っ込む。

沖田「血が止まるまで嚙んでろ」

敦子「ふあい」

興奮冷めやらない月奈。

月奈「あの！ 何があったんですか？」

沖田「何がって、お前もデモに出てたんじゃないのか？」

月奈「デモ？ そんなの知らないですよ！

私は新宿駅のホームにいて気が付いたら線路に落ちて……。私死んだのかも！」

沖田「はっ？」

月奈「死んで転生しちゃったんだ！ もしかしてここってモンスターとか出ます？」

沖田「モンスターってゴジラのことか？」

月奈「ゴジラいるんですか！」

沖田「いねえよ！ あれは映画だろ。お前、サツに頭やられたのか？」

月奈「……」

辺りを見渡す月奈。

木造の建物が並んでいる。

月奈「まさか……。今年って何年ですか？」

沖田「今年？ 43年だろ」

月奈「43年ってことは、終戦が1945年だから戦争中！」

沖田「はあ？ 43年って昭和43年だからな」

月奈「ショーワ43年？ ってことは西暦だと、えっと……」

沖田「1968年」

月奈「1968年？ 50年前……」

愕然とする月奈。

月奈「なんで私こんなところに……」

沖田「お前、学生か？」

とっさに身構える月奈。

沖田「サツじゃねえから殴らねえよ」

月奈「だ、大学生です……」

沖田「家は近いのか？」

月奈「家は……。多分ないです」

沖田「学生なのにフーテンなのか？」

月奈「……」

沖田「宿無しなら付いて来い。一晩ぐらい泊めてやる」

沖田、敦子を抱えて歩き出す。

動かない月奈。

沖田「どうした？」

月奈「一人にしてください……」

沖田「こんなとこいたらサツにパクられるぞ。

それに連続射殺事件の犯人がそこら辺でピストル持って潜んでいるかもな」

月奈「えっ？」

月奈、慌てて沖田を追う。

○大学・校門（夜）

月奈と、敦子を背負った沖田がやってくる。

月奈「あれ？ ここってうちの大学……」

沖田「なんだ。一緒だったのかよ。それなら

参加も全く問題ないな」

月奈「参加？」

○同・キャンパス内（夜）

沖田と敦子の後ろをついて行く月奈。
暗闇のなか、所狭しにタテカンが並んで
いるのが見える。
月奈、不安を隠せない。

○同・学生会館・玄関（夜）

月奈、沖田、敦子がやってくる。
バリケードで塞がれている入口。
沖田、バリケードの隙間から中を覗く。
沖田「だれかいるか？」
中からバリケードの一部が解けて丸山
優（20）が顔を出す。

沖田「丸山」

丸山「沖田さん。無事でしたか」

沖田「これくらいで俺がパクられるかよ」

沖田と敦子がバリケードの中に入って
いく。
立ちつくしている月奈。

沖田「おい！ 早くしろ！」

月奈、恐る恐る中へ入る。

丸山がバリケードを元に戻そうとする
が崩れてしまう。

沖田「なにやってんだ！」

丸山「すみません！」

月奈「……」

壁一面に書かれた落書きの数々。

「革命は愛だ」「体制粉碎」「戦わず
して倒れることを断固拒否する」「K
子、また君に会いたい」等々。
月奈の表情が引きつっている。

○同・談話室（夜）

物が散らかっている室内。

部屋の中央にはこたつがある。

月奈が入って来る。

敦子をソファに降ろす沖田。

沖田「バリの中は初めてか？」

月奈「バリ？」

沖田「バリはバリケードだろ」

月奈「はあ……」

沖田「サツにヤラれそうになってむかついた
だろ？ これを機にお前も全共闘に入れ」

月奈「ゼンキョートー？」

月奈、室内に転がる「全共闘」と書か
れた大量の赤いヘルメットに気が付く。

月奈「……」

沖田「俺たちはノンセクトだし固いこと考え
なくていいからな。まずは腐りきった大学
体制からぶっ潰してやろう」

月奈「け、検討させていただけます……」

沖田「そう言えば名前は？」

月奈「も、本橋月奈です」

沖田「ルナ？」

月奈「月に奈良県の奈でルナ。変な名前です
よね。嫌になります」

沖田「親つてのは勝手な人間だからな。月と
いえば、アメリカのアポロが月に行くかも
知れないよな」

月奈「えっ？ まだ行ってないの？」

沖田「行ってねえよ」

月奈「……」

沖田「お前も今日はここで寝ろ。敦子、また
朝来るから血が完全に止まるまではそのま
までな」

ハンカチを口に入れたままの敦子。

敦子「あふいふあほう（ありがとう）」

去っていく沖田。

月奈、敦子が自分を睨んでいることに
気が付く。

月奈「な、何ですか？」

敦子「ふんっ」

月奈に背を向ける敦子。

月奈、怯えた表情で落ち尽きなく部屋
を見渡す。

○同・校門（朝）

月奈が必死に走って外へと出て行く。

○同・談話室（朝）

沖田が入って来る。

室内には敦子だけがいる。

敦子「沖田くん。昨日は本当にありがとう。」

私、沖田くんがいなかったら……」

沖田「あいつは？」

敦子「え？」

沖田「昨日新宿で拾った女。月奈だっけ？」

ムスツと不機嫌になる敦子。

敦子「朝早く出ていった。日和ったのよ」

沖田「そうか。オルグ失敗だな」

○駅前

月奈が呆然と立っている。

駅に向かう大勢のサラリーマン。

歩きタバコをする人々。

月奈、タバコの煙を必死によける。

月奈の足下にはゴミや吸い殻がたくさん転がっている。

月奈「うわあ……」

クラックションを鳴らして走る車。

月奈、排気ガスを浴びて激しくむせる。

顔にすすが付いていることに気が付く。

○公衆便所・表

月奈がトイレに入っていく。

がすぐに鼻をつまみながら慌てて出てくる。

月奈「くさあ！」

野良犬と目が合う月奈。

思わず頬が緩む。

月奈「君も独りなの？」

野良犬が集まり出す。

月奈「ん？」

○路上

月奈が野良犬たちに追いかけられている。

月奈「いやあああ！」

月奈の足が側溝に落ちる。

月奈「……。昭和サイテー」

月奈を野良犬たちが見つめてる。

○公園

洗われて濡れた月奈の足下。

月奈がベンチにうなだれて座っている。

沖田が公園の前を歩いている。

沖田「ん？」

月奈に気が付いてやってくる沖田、持

っていたあんパンを月奈に渡す。

沖田「食うか？」

月奈「……。お金持ってないです」

沖田「おごってやる」

月奈「……」

月奈、パンを奪うように取って勢いよく食べる。

沖田がタバコに火を付ける。

タバコの煙に背を向ける月奈。

沖田「ん？ どうした？」

泣きながらあんパンを乱暴に口に入れている月奈。

月奈「うっ！」

のどに詰まり慌てて水場へ。

蛇口をひねると大量の水が顔にかかる。

月奈「ぶべっ！」

月奈、やけくそで水を飲んで顔を洗い、力なくベンチに戻ってくる。

沖田「そんなに腹減ってたのか？ もう一個食うか？」

月奈「私、なんでこんな場所に……」

沖田「なんでって、なんでだ？」

月奈「昨日も話したじゃないですか。私は2018年の新宿駅で電車で轢かれそうになって、気が付いたらこんな50年前の昭和にいて……」

沖田「ちよっと待て。2018年ってことは、

お前21世紀から来たっていうのか？」

月奈「はい……」

爆笑する沖田。

月奈「えっ？」

沖田「ひやはは！ 21世紀って言えばこないだ2001年ナントカってSF映画見たぞ。途中寝たけどコンピュータが人間の会話を読み取ってしゃべるんだろ？」

月奈「しゃ、しゃべりますけど」

沖田「ひやはははは！ 地球は猿に支配されてるのか？」

月奈「されてませんよ」

沖田「あれはもつと先か！ ひやははは！

革命はいつあった？」

月奈「革命？ どこですか？」

沖田「どこでって。日本で」

月奈「そんなのはありませんが？」

沖田「日本は資本主義のままか？」

月奈「資本主義ですよ。お金持ちは果てなく

お金持ちだし、ビンボーはビンボーです」

沖田「世界から戦争はなくなったか？」

月奈「戦争？ ん……。なくなりそうにはないですね」

沖田「ナンセンス！」

月奈「ナ、ナンセンス？」

沖田「お前ウソ付いてるな！」

月奈「ええ？」

沖田「未来から来たとかふざけたこと言いやがって！ 俺たちが血を流して闘争やってるのに社会が変わらないわけないだろ！」

月奈「いやいやいや！ 未来は良くなりましたよ。車の排気ガスは減りましたし、トイレも臭くなくて。それに東京のド真ん中に野良犬はいませんから！」

沖田「お前、便所や野良犬と闘争を一緒にするのか！」

沖田、タバコを地面に投げ捨てる。

月奈「タバコのポイ捨てもありえませんか！」

沖田「はん？」

月奈を睨む沖田。

月奈「す、すみません……」

沖田「お前、あんパン食べたな」

月奈「あつ、はい」

沖田「1個20円」

月奈「安いですね」

沖田「こないだ値上がりしたばかりだろ？」

お前ブルジョアか？」

月奈「ブルジョア？」

沖田「あんパンを買った金は大衆からカンパされた闘争のための大事な資金だからな。」

あんパン分は戦ってもらうぞ」

月奈「た、戦うってのは？」

沖田「闘争に参加しろ」

月奈「闘争って昨日みたいなの？ いやいやいや、ムリですよ！」

や、ムリですよ！」

沖田「お前、社会に不満はないのか？」

月奈「そりや不満はありますけど。全然就活

うまくいかないし……」

沖田「それを変えるのが闘争だ！」

月奈「そんな突然言われても。私、こっちに

来たばかりで右も左も分かりませんし」

沖田「右も左も知らずにデモに出たのか？」

月奈「すみません……。ん？ 右左って意味

食い違つてませんか？」

沖田「お前もどうせデモに出たせいで親に家

を追いつけられた口だろ？ いいから来いっ

て。食いものと寝るところだけは保証して

やる」

月奈「……」

○大学・学生会館・調理室

調理台に並ぶ豚バラと玉ねぎ。

不安げな月奈。

沖田、敦子と本庄博子（21）に。

沖田「それじゃ食糧部として今日からよろし

く頼むぞ。敦子、博子。あとは任せた」

去っていく沖田。

敦子、不機嫌な様子。

博子「月奈さんって言ったけ？ とりあえず

玉ねぎぶつ切りにしてちょうだい」

月奈「はい……」

月奈、玉ねぎをむき出す。

敦子が隣に来て玉ねぎをむく。

敦子「沖田くんはどこ行ってたの？」

月奈「どこって。ひたすら店を回って安い豚肉と玉ねぎを探して」

敦子「ふーん」

月奈「あの、もし服余ってたら貸してくれませんか？ さっき汚れちゃって……」

敦子、剥いた玉ねぎの皮を月奈の方へ捨てる。

月奈「わっ！」

敦子「あっ、ゴメンゴメン」

月奈「……」

○同・談話室（夜）

月奈が食卓に鍋を置く。

敦子が月奈を押しつけるように、横におにぎりを並べる。

月奈「……」

沖田ら学生たちが二十人ほど入ってくる。

最後に入って来る綿引京子（23）と

猪野克成（25）。

京子「また豚玉鍋？」

沖田「京子さん、猪野さん。コイツがさっき話したヤツです。新宿でオルグしてきた」

京子「ふーん」

月奈「よ、よろしくお願いします……」

京子「猪野くん、外で食べよう」

猪野「ああ」

京子、猪野と共に出ていく。

月奈「……」

沖田「丸山はまだ見張りしてるのか？ 月奈呼んできて」

月奈「あっ、うん」

部屋を出て行く月奈。

敦子が月奈を見ている。

○同・廊下（夜）

月奈が歩いている。

敦子が後ろからやってくる。

敦子「あんた、沖田くんとどういう関係？」

月奈「えっ？ どういう関係って、昨日会っ

たばかりだし別に……」

敦子「今さ、沖田くんは指導部に入れるかっていう大事な時期なの。沖田くんにはあんなをオルグした責任があるんだから、あんなが変なコトしたら、京子さんに目を付けられて沖田くんまで評価が落ちるんだから気をつけてよね」

月奈「京子さんってさっきの人？ ここのリーダーなの？」

敦子「議長は隣にいた猪野さん」

○同・玄関（夜）

バリケードの前に座る丸山。

居眠りをしている。

京子と猪野がやってくる。

京子「ちよつと！」

驚いて目覚める丸山。

丸山「すつ、すみません！」

慌ててバリケードをどかして道を作る。

京子「寝てたら見張りの意味がないでしょ。

バカじゃないの」

丸山「すみません……」

○同・廊下（夜）

月奈と敦子。

月奈「あの、ずつと気になっていたのですが

オルグって何？」

敦子「オルグは勧誘って意味よ。てかそんな

ことも知らないでここに来たわけ？」

月奈「勧誘なら勧誘って言うてくれればいい

のに。わざわざ横文字使わないで」

敦子「とにかく沖田くんに迷惑かけないで」

月奈「……」

敦子「なに？ まだ気になることがあるって

顔してるけど？」

月奈「いや別に」

敦子「いいから言いなさいよ！」

月奈「……。敦子さん。もしかして、沖田く

んのこと好きなんですか？」

敦子「えっ？」

赤面する敦子。

敦子「べ、別にそういうワケじゃないから！
私は沖田くんのためじゃなくて、大学権力の粉砕のためにあんたにもしつかりしても
らいたいだけなんだから！」

月奈「へえ」

敦子「早く丸山くん呼んできて！」

去っていく敦子。

月奈「ツンデレって昭和にもいたんだ」

○同・女子部屋（夜）

布団が並べられている室内。

女子ばかりが十人ほどいる。

着替えた月奈が敦子の横に布団を敷く。

月奈「なんか部活の合宿みたい」

敦子「ナンセンス！ あんた学校権力に管理
された部活の合宿なんかと闘争を一緒にし
てるわけ？」

月奈「い、いや。そんなつもりは……」

敦子「大学の使途不明金の追求から始まった
闘争は今や学費値上げ阻止、エンプラ寄港
阻止、三里塚の新空港建設阻止、ベトナム
反戦、安保反対等々に拡大の一途をたどっ
ている。その中で私たち一人一人がいかに
行動していくかが体制粉砕への楔へととなっ
ていくのよ！ 分かっている？」

月奈「……。あつ、はい」

敦子「全然分かってないでしょ」

月奈「いやあ……。敦子さんはいつからここ
に？」

敦子「私は10・8（ジュッパチ）の前くら
いからだからまだ一ヶ月よ。たまたま大学
の食堂で横に座った沖田くんからオルグさ
れて、それで参加することに決めて」

月奈「沖田くんからオルグかあ……」

赤面する敦子、布団に潜り込む。

月奈「あつ、布団バリケードだ」

敦子「うるさい！ 寝ろ！」

頬が緩む月奈。

博子がやってくる。

博子「最近人が増えてきて食糧の買い出しも大変だから、明日も忙しくなるわよ」

月奈「あの……。私、この運動って言うのがいまいち分からなくて。何してるのかこっそり教えてもらいたいですか……」

博子「私も最近入ったばかりだから、詳しくは沖田くんに聞きなよ」

月奈「そうですか。じゃあ、沖田くんに聞いてみますね。ん？」

視線を感じて振り返る月奈。

敦子が布団の隙間から月奈を睨んでる。

月奈「いやいや。私、他人の好きな人奪うなんてことしないから！」

敦子「もう！」

布団に隠れる敦子。

月奈、思わず笑みがこぼれる。

○同・廊下

沖田が歩いている。

手にはマルクスなどの書籍。

○同・談話室

月奈が学生たちといる。

沖田が入って来る。

沖田「なんでこんなに人がいるんだ？」

月奈「あつ。私が沖田くんから勉強会を受けらるって言ったら、みんなも聞きたいって」

一同「お願いします！」

沖田「……。今日は余り時間がない。月奈だけにしてくれ」

月奈「でも折角の機会だし……」

沖田「頼むから」

月奈「？」

○同・談話室前廊下

博子ら学生たちが室内を気にしている。

食糧を抱えた敦子がやってくる。

敦子「あれ？ みんなどうしたの？」

博子「沖田くんがね、月奈に付きっきりで勉強会してるの。みんな追い出しちゃって」

敦子「えっ？」

○同・談話室

机に並ぶ分厚い本の数々。

月奈、チンプンカンプンの様子。

沖田が月奈の前で講義をしている。

沖田「こういつた数々の闘争を経て、先日の10月21日の新宿での国際反戦デーに繋がったわけだ。これからとしてはな……」

月奈「あの。なんで佐世保にテンプラが？」

沖田「テンプラじゃなくてエンプラ！ 原子力空母のエンタープライズ号な！」

月奈「はあ……」

沖田「そこに置いた本は全部読んどけよ」

月奈「ええ、全部？ これってマンガになつてるのとかないんですか？」

沖田「マンガ？ そんなガキが読むモノなんであるか！ 頭悪くなるぞ」

月奈「あとまだよく分からない言葉が。タイシューダンコーにゾーハンユーリ？」

沖田「お前本当に大学生か？」

月奈「一応……」

敦子が入って来る。

敦子「はい！ 月奈にはまず行動をさせて、そこで感じたコトから思想を学ばせないと行けないと思う！」

沖田「異議なし！ てかいきなり入って来るなよ」

敦子「だって……」

沖田「だが敦子の言うとおりだな。思想は行動により決まる。知識だけを詰め込んだ頭でっかちは闘争じゃ役に立たないからな」

月奈「それ分かります！ 頭でっかちで不明確な目標と自慢だけデカくて、実際は何も行動してない人たちのことを意識高い系って言いますからね」

沖田「へえ。そんな言葉初めて聞いたな。お前もその意識高い系なのか？」

月奈「あんな連中と比べないでください！」

沖田「それなら、お前の行動をみせてもらお

うか？」
月奈「行動？」

○大通り

道路を占拠しているデモの集団。
猪野がアジをしている。

猪野「ここに結集されたああああ！ すべて
のおおおお！ 学生、労働者、諸君！」

ヘルメットを被った月奈がつまらなそ
うに見ている。

その両脇には沖田、敦子、丸山。

× × ×

あくびをしている月奈。

猪野のアジ。

猪野「この闘争を戦い抜くことをお！ ここ
に改めてえ！ 誓うっ！」

一同「異議なし！」

拍手をするデモ隊。

月奈「やっとな終わった。今日ご飯なに作ろう
かなあ」

月奈、沖田と丸山に両脇を組まれる。

月奈「ちよちよちよ、なんですか！」

敦子が月奈と沖田の間に割り込む。

敦子「本番はこれからよ」

月奈「えっ？」

デモの先頭に連れて行かれる月奈。

ジグザクデモが始まる。

一同「安保粉碎！ 闘争勝利！」

足がもつれている月奈。

月奈「わわわわわ！」

沖田「月奈！ お前もコールしろ！」

月奈「（やる気なく）あんぼおふんさい。と

ーそーしよーり」

沖田「口だけか！ 意識高い系！」

月奈「（ムキに）安保粉碎！ 闘争勝利！」

進むデモ隊。

目の前に機動隊が立ちふさがっている。

警察のアナウンス「このデモは届け出がされ
てない無許可のデモだ！ ただちに解散し
なさい！ 解散しなさい！」

月奈「おわっ警察！」
一同「帰れ！ 帰れ！」
月奈「ええ……」
沖田が月奈にゲバ棒を渡す。
月奈「何ですかコレ？」
沖田「ゲバ棒だ」
月奈「ただの角材ですよね？」
沖田「敦子は下がってろ」
敦子「私もやる！」
沖田「また歯を折りたいのか！ 美人が台無しになるぞ！」
敦子「そ、そこまで言うなら……。沖田くん、気をつけてね」
敦子、にやけ顔で去っていく。
月奈「私も美人を台無しにしたくない！」
熱を増していくシュプレヒコール。
デモ隊の投石が機動隊の盾に降り注ぐ。
丸山の手が震えている。
沖田「丸山、いい加減になれる！」
丸山「だ、大丈夫です！」
警察のアナウンス「検挙！」
デモ隊に迫る機動隊。
月奈、後ろにはデモ隊、前には機動隊がいて逃げられない。
月奈「ちよちよちよちよ！」
デモ隊と機動隊の激突が始まる。
沖田が機動隊にぶつかっていく。
沖田「うおおお！」
丸山も覚悟を決めて駆け出す。
丸山「うわああ！」
丸山、転がってきた催涙弾を踏んで転倒する。
催涙ガスにまみれる月奈。
月奈「ぎやあああ！」
一目散に逃げ出す月奈。
沖田「おい月奈！ 逃げるな！ クソツ！」
デモの外にいる京子が逃げていく月奈を見ている。

○大学・学生会館・談話室（夕）

月奈が学生たちの前に座らされている。
月奈を厳しい表情で見つめる沖田。
頭を冷やしている丸山。
心配そうに見ている敦子。

京子が月奈の前に立つ。

京子「なぜ逃げた！ みんな命がけで戦っているのに、1人だけ日和って！」

月奈「だって、私歯折られたくないし、あの煙は本当にダメで……」

京子「歯の一本や二本何よ！ 催涙ガスくらいで！ 敵前逃亡したことを今ここで自己批判しなさい！」

月奈「えっ？」

京子「いいから自己批判しなさい！」

月奈「ジコヒハンって？」

京子「自己批判は自己批判でしょ！」

月奈「えっと……。反省って意味ですか？」

京子「違う！」

月奈「じゃあどういう意味で？」

京子、月奈をビンタする。

月奈「えっ？」

京子「私たちは傍若無人なる権力に対する闘争をしているのよ！ ごっこじゃないの！」

京子、学生たちの方を向いて。

京子「権力者どもは私たち若者の怒りに気が付きながらも見て見ぬ振りをし、自分たちだけが甘い蜜を吸いがたんために民衆を苦しめ、社会を改悪しようとしている！ 私たちはその横暴振りに必ず鉄槌を下す！ 権力に屈して逃げるくらいなら今すぐここを去るべきよ！」

一同「……」

京子「異議は！」

一同「い、異議なし！」

沖田「……」

敦子「……」

満足な表情の京子。
頬を抑えてうつむく月奈。

○同・女子部屋（夜）

月奈が布団に隠れている。

月奈「(泣き声) なんてあんなことで叩かれなきやいけないの……。昭和の根性論ありえないよ……」

敦子が声をかけられずにいる。

部屋の外から足音と博子の声が近づいてくる。

博子の声「ちよつと！ 男子禁制ですよ！」

沖田と博子が入って来る。

敦子「沖田くん？」

沖田「その布団バリケードは月奈か」

敦子「あつ、うん」

月奈「……」

沖田「月奈。俺はお前がどこから来たとか、ろくに勉強してないとかはどうでもいい。でもな、ここにいる者は全員、大学に対してや社会に対して、大人に対して怒りを持っている。何かを変えたくて必死なんだ」

月奈、布団に潜ったまま。

月奈「私だつて全然就活うまくいかないし不満はたくさんあるよ。だけどさ、社会を変えなんて私たちみたいな若者にはどうしようもできないことだよ」

沖田「お前みたいにやってもないクセにできないつて言うヤツが一番腹立つ！ タダ飯食いやがって！ お前に怒りはないのか！ なぜ抗おうとしない！ 若者だからって俺たちは無力じゃない！」

月奈「でも……」

沖田「月奈。社会を変える前に自分を変えようともせずに行動もしないのならば、今すぐバリを出ていけ」

月奈「……」

部屋を出て行く沖田。

敦子「月奈……」

布団に潜ったままの月奈。

○同・学生会館・表(朝)

人影が近づいてくる。

○同・女子部屋（朝）

寝ている敦子ら女子たち。

月奈は寝られず天井を見つめている。

月奈「……」

破壊音と怒号が響く。

飛び起きる一同。

月奈「なにになになに！」

敦子「バリケード破り！」

月奈「えっ？」

○同・玄関（朝）

飛び交う怒号。

バリケードを内から抑えている沖田、

丸山ら全共闘学生たち。

外からは屈強な体格の学生たちがバリ

ケードを壊している。

○同・女子部屋（朝）

激しくなる破壊音と怒号。

震える月奈、敦子、博子ら女子たち。

月奈「け、警察の突入？」

敦子「違う。前にも一度やられたんだけど、

大学当局が体育会の部活の連中を使ってス

トライキを粉碎しようとしているのよ」

月奈「えっ？ 同じ学生だよね？」

博子「私たちのことを気に入らない学生なん

てごまんというわよ。学生だけじゃなくて

外部の人間も来てると思うけど」

敦子「体育会の連中はさ、就職が大学のコネ

で決まるから当局のいいなりなのよ」

月奈「そ、それってつまり就活しなくていい

ってこと？ なんかずるい！」

一回り大きい音が響く。

月奈「ひっ！」

近づいてくる足音。

屈強な体格の高部修平（22）が扉を

開ける。

女子一同「きゃあ！」

高部「おい！ 革命ごっこは終わりだ！ と

つとと出てけ！」

敦子、高部の前へ。

敦子「なによ！ 大学当局のイヌが！」

高部「女が男にえらそうな口聞くな！」

高部が敦子を思いつきり殴る。

月奈「敦子！」

倒れた敦子を庇う月奈。

高部「大学にも女が増えてこれからは女の時代だつて言われてるが、男に向かって生意氣言つていい訳じゃねえからな！」

月奈「これからは女の時代？」

高部「はん？ 何か言ったか？」

月奈「その言葉、21世紀になつても全く同じこと言つてるんだけど……」

高部を睨む月奈。

高部「なんだその目は！ 女のクセに！」

月奈「分かった。あんたみたいな脳みそ筋肉がか弱い人たちを押さえつけて威張りたいから、いつになつてもこれからは女の時代だつて言い続けてるんだ」

女子一同「……」

高部「何言つてるんだ？ クソアマ」

月奈、とっさに布団を丸めて構える。

高部「おつ。柔道部の俺とやり合うのか？」

月奈「私は無力じゃない」

高部「女じゃねえか。無力だろ」

女子たちが各々の布団を丸めて立ち上がる。

高部「へっ？」

敦子「無力じゃない！」

月奈「私たちは無力じゃない！」

高部に突進していく月奈。
続く女子たち。
思わず逃げる高部。

○同・廊下（朝）

部屋から出てきた女子たちが高部を丸めた布団でボコボコに殴り倒す。

高部「うぐっ！」

そのまま高部を布団の下敷きにして踏みつける月奈と敦子たち。

敦子「せっかく機動隊にやられた傷が治って
美人が戻ってきたのに！ このこの！」
月奈「コネで就活決まるなんてずるい！ こ
っちは何十社落ちてると思ってるのよ！

このこのこのこの！」

沖田の声「敦子！ 月奈！」

声に振り返る月奈と敦子。

沖田がいる。

沖田「逃げろ！」

月奈「えっ？」

相撲部らしき体格の川波昭典（20）
が沖田を軽々と投げ飛ばす。

敦子「きゃあ！」

一目散に逃げていく女子たち。

沖田を追い詰めていく川波。

月奈が箒を拾って駆け寄り、川波の胴
を思いつきり殴る。

びくともしない川波。

月奈「あら？」

川波、月奈から箒を奪い二つに折る。

追い詰められる月奈。

沖田が川波の背後から股間を思いつき
り蹴り上げ、ふらついたところを素早
く足払いする。

倒れて気絶する川波。

沖田、親指を突き上げて。

沖田「やったぜベイビー！」

月奈「えっ？」

沖田「お前、やったぜベイビーも知らないの
か？」

月奈「や、やったぜベイビー！」

笑い合う月奈と沖田。

敦子が不機嫌そうに二人を見ている。

高部が布団の下から這い出てくる。

敦子、高部を踏みつける。

高部「ぎゃっ！」

○同・学生会館・表

救急隊が負傷者を搬送している。

○同・談話室

メチャクチャに破壊されている。

○同・中庭

疲れ切った学生たちに混じって、月奈と博子がぐったりと座っている。

月奈「結局やられちゃった……」

博子「何してもさ、力を持った人間に勝てるわけないのかもしれないよね」

月奈「……」

博子「月奈。私、とりあえず家に帰るから。

みんなに伝えておいてよ。気が向いたら戻ってくるから」

月奈「うん」

去っていく博子。

月奈、ため息を漏らして空を見上げる。

沖田がやってくる。

沖田「何してるんだ？」

月奈「今日寝るところを考えてたの。思い切ってお婆ちゃんところ行ってみても良いけど、たぶんパニックを起こすだろうし……」

沖田「何言ってるんだお前？ また頭打ったのか？」

月奈「……」

沖田「次の拠点が決まった。付いてこい」

月奈「えっ？」

○同・経済学部棟・表（夕）

学生たちが一列に並べた長いすに石けんを塗り、その上を滑らせて椅子や机などを校舎に運び入れている。

月奈、沖田がやってくる。

沖田「今からはここ経済学部棟が拠点だ。バリにする机とか椅子がこれで滑ってくるから、どんどん送り出してくれ」

月奈「ねえ、こんなことしてもまた壊されちゃうと思わない？ あいつら、今度はおつとたくさんで来るかも知れない。そうしたらまた……」

沖田「そうしたらまた作ればいいだろ。自分

の居場所くらい自分で作れって」

月奈「えっ」

敦子が机を運びながら、月奈と沖田の間に入ってくる。

敦子「手伝わないなら出て行ってよ。少し寂しくなるけど」

微笑む月奈、机運びを手伝い出す。

離れた所から、京子が月奈を気に食わなそうに見ている。

○猪野のアパート・室内

二間の部屋。

京子が裸で寝ている。

猪野、服を着てタバコに火を付ける。

京子「猪野くん。あの女をどうにかしてもらいたいんだけど」

猪野「あの女って？」

京子「月奈って変な名前の女よ。自己批判もしないでさ。日和り者のクセに。ああいうのは今のうちにどうにかしておかないと」

猪野「これからつとときに人が減るのは困る。オルグを強化して人員を増やしていかない」と戦えないぞ」

京子「ちっ……」

ノックの音。

猪野「はい？」

男の声「速達です」

○同・玄関

鍵を開ける猪野。

ドアが開き、刑事1と刑事2が現れる。

刑事1、警察手帳を見せて、

刑事1「猪野克成。先日の無許可デモの件で署まで来てもらうぞ」

猪野「……」

逃げようとする猪野だが、あつという

間に刑事1に組み伏せられる。

刑事1「中を見ろ！」

刑事2が中へ踏み込んでいく。

○同・室内

刑事2が入って来る。

乱れた布団。

開けっ放しになっている窓。

刑事2「逃げたぞ！」

○路上

中途半端に服を着た京子が裸足のまま
必死に走っていく。

○大学・経済学部棟・集会室(夜)

以前の学生会館より手狭な室内。

沖田、丸山、敦子ら十人ほどの学生が
いる。

月奈が鍋のフタを開ける。

月奈「じゃーん！」

一同「おお！」

月奈「豚バラと白菜のミルフィーユ鍋！」

沖田「ミルフィーユってなんだ？」

月奈「ええ？ 沖田くん知らないの？」

沖田「マルクス・レーニンで一人の男だと思
ってたヤツに言われたくねえよ」

敦子「いいから、いいから。食べよ食べよ」

一同「いただきまーす！」

一同、食べて。

月奈「どう？ どう？」

反応のない一同。

敦子「月奈、やっぱり味薄いよ」

月奈「健康志向よ。塩分取りすぎは良くない
から」

丸山がタバコに火を付けようとする。

月奈、丸山のタバコを取り上げて。

月奈「食事中に吸わないの！ 守らないと全
館禁煙にするよ！」

丸山「あつ、はい……」

沖田が器に醤油をドバドバ入れている。

月奈、醤油を沖田から取り上げる。

月奈「なんでも醤油かけないの！」

沖田「俺は濃い味が好きなんだよ！」

月奈「おじいちゃんかっ！」

醤油を奪い合う月奈と沖田。

室内が笑いに包まれる。

息を切らした京子が駆け込んでくる。

京子「猪野さんがパクられた！」

一同「ええ？」

京子「大学当局と権力が手を組んでいるのよ。こないだのバリケード破りと言い、入試が近くなつたから完全に私たちを潰しにかかっている」

敦子「来週のデモはどうするんですか？ 猪

野さんの代わりにアジは誰が？」

京子「それは指導部で決める。あなたたちはオルグを強化して」

月奈「沖田くんやれば？」

沖田「えっ？」

月奈「その、えつと……。サバだけ？」

沖田「サバじゃなくてアジな。アジテーション。じゃなくて俺にアジはムリだ」

月奈「でも、沖田くんが一番先頭に立ってデモつてるし、みんなから信頼もあつて適任かと思うよ」

京子「ちよつと。食糧隊の下っ端が勝手なこと言わないでくれない？」

敦子「い、異議なし！」

京子「あたり前よ」

敦子「沖田くんがアジをやることに、私も異議なしです」

京子「えっ？」

丸山、弱々しく手を挙げて。

丸山「俺も意義なしです。沖田さんで」

次々と声を上げる一同。

一同「異議なし！」

呆然とする京子。

沖田「いやいやいや。ムリだから」

月奈「やってもないのにムリだって言わないの！」

沖田「……」

拍手する一同。

京子「ちつ……」

笑顔の月奈と敦子。

不安げな表情の沖田。

○同・キャンパス内

集まっている学生たち。

月奈、敦子、丸山が最前列にいる。

京子は離れた所から見ている。

沖田が前に出てくる。

月奈「頑張っつて！」

沖田、大きく深呼吸をしてトラメガを構える。

沖田「こっつ、ここに……」

月奈「？」

沖田「こ、ここに結集されっ……た。す、すべつの……」

ヤジ「聞こえネエぞ！」

沖田の手が震えている。

沖田「す、すべての……。ガクガクガク、学生……」

ヤジ「ふざけてるのか！ 根性なし！」

月奈、沖田の元へ。

月奈「沖田くん、大丈夫？」

息が上がっている沖田、学生たちに背を向ける。

沖田「む、昔からどうしても人前で話せないんだ。なんていうか、こういう根性がどうしてもなくて……」

月奈「ただのあがり症でしょ。誰にでもありえることだし根性じゃなんかじゃない」

沖田「……」

投石が月奈の後頭部に当たる。

月奈「いっ！」

沖田「月奈！」

石を手にした京子がほくそ笑んでいる。

頭を抑える月奈、手に血が付いている。

慌ててハンカチで止血をする沖田。

沖田「月奈、悪かった。俺がちゃんとアジを断つてればこんなことには……」

月奈「……。沖田くんは悪くない」

月奈の表情が怒りに満ちてくる。

沖田「月奈？」

立ち上がる月奈、学生たちに向かって
トラメガを構える。

月奈「卑怯者出てこい！」

京子「ん？」

月奈「自分は安全な場所について傷つくことは
ないからって平気で人を傷つけることをす
るなんて！ そんなのいつの時代でも意地
汚い人間のやる事よ！ 猪野さんの代わり
に頑張ってアジをしようとしていた沖田く
んに向かって石なんか投げて！ 恥ずかし
いと思わないの！」

一同「……」

敦子「い、異議なし……」

沖田「月奈？ お前……」

京子が前に出てくる。

京子「ちよつと！ なんだあんたがアジつて
るの！ 偉そうに！ デモから逃げてたク
セに！ ん？」

京子、手に持っている石に気が付いて
慌てて隠す。

月奈「逃げないから」

京子「はっ？」

月奈「私はもう逃げない！」

熱を帯びていく月奈の口調。

月奈「今ここにいるみんなは誰に対して怒り
を感じてますか？ それは大人たちですよ
ね？ でもその大人たちも昔は私たちと一
緒の若者だったんです。だから、今の私た
ちと同じように大人たちに怒りを向けて文
句を言っていたと思います。それなのに自
分たちが大人になると若いとき感じてい
たはずの痛みや怒りを忘れて、最近の若い
者はとか目を敬えとかって言葉を繰り返
す大人になるんです！ みんなはそういう
尊敬できない大人になりたいの？ 私は絶
対になりたくない！」

沖田「る、月奈？」

京子「お前、いい加減にやめないと……」

月奈「ゆとり教育だって決めたのは大人たち
なのに！ なんてそれで私たちがくられ

てバカにされなきゃいけないの！」

首をかしげる敦子。

敦子「ゆとり教育？」

月奈「ああもう！ とにかく！ とにかく五十年後に若者が苦しむ未来を繰り返さないために！ 今ここで！ 私たち若者が！ 大人たちをぶつ潰して！ この社会を変えないと！ いけないんです！」

敦子「異議なし！」

丸山「異議なし！」

一同「異議なし！」

盛り上がる学生たち。

沖田「……」

月奈「私たち若者は！ 決して！ 決して！

決して！ 無力なんかじゃない！」

一同「異議なし！」

拍手喝采を浴びる月奈。

沖田「月奈……」

月奈、興奮が冷めやらない様子。

月奈「デモるぞおおお！」

○大通り

ジグザグデモ。

月奈が先頭でシュプレヒコールをあげている。

月奈「闘争勝利！ 闘争勝利！」

京子がデモの外からあ然と見ている。

デモ隊の前に機動隊が現れる。

警察のアナウンス「ただちに解散しなさい！ 解散しなさい！」

沖田がやってくる。

沖田「月奈。今日は人が少ない。ここは引いて、衝突は避けよう」

月奈「帰れ！ 帰れ！」

沖田「聞いているのか！」

一同「帰れ！ 帰れ！」

警察のアナウンス「検挙！」

デモ隊に駆け寄る機動隊。

月奈、ゲバ棒を掲げて。

月奈「いけええ！」

応戦を始めるデモ隊。

沖田「くそっ！」

応戦する沖田だが、デモ隊のゲバ棒が顔に当たり、ふらついたところをもみくしゃにされて倒される。

月奈は沖田に気が付かず機動隊とやり合っている。

○大学・キャンパス内

学生たちの前で月奈がアジをしている。

月奈「ここに結集されたああああ！ すべてのおおおお！ 学生ええ！ 労働者あ！ 諸君っ！ すでに私たちの闘争は学生を統治しようとする大学当局を叩き潰すものだけではありません！ 若者である私たちが汚い社会を作り上げた大人たちに退場を迫り、変革を成し遂げるときなのです！」

一同「異議なし！」

後方で足にギブスを付け、松葉杖の沖田が見ている。

沖田「……」

○同・経済学部・集会室（夜）

月奈が楽しそうに学生たちと、「若者よ」を合唱をしている。

○大通り

対峙するデモ隊と機動隊。

ヘルメットを被り、タオルで顔を隠した月奈が駐車された車の上に乗る。

月奈「帰れ！ 帰れ！」

松葉杖の沖田が慌ててやってくる。

沖田「これ以上目立つな！ 公安にマークされるぞ！」

月奈「顔隠してるんだから平気よ。帰れ！ 帰れ！」

沖田「おい！」

詰め寄る機動隊。

月奈「来た来た来た！」

月奈、車から飛び降りる。

月奈の足下に催涙弾が転がってくる。

沖田「うわぁ！」

月奈「これ大っ嫌い！」

月奈、催涙弾を掴むと機動隊へ投げ返す。

催涙ガスに乱れる機動隊。

月奈「やったぜベイビー！」

機動隊と激突するデモ隊。

月奈、前線で機動隊と激しくやりあっている。

沖田、月奈を一瞥すると去っていく。

○大学・経済学部棟・集会室（夜）

クリスマス仕様に飾られた室内。

いつもより豪華な料理が並んでいる。

月奈、グラスを掲げて、

月奈「メリークリスマス！」

一気に飲み干す。

月奈「イエーイ！」

酔っている敦子が月奈に抱きつく。

敦子「マドンナア！ バンザイ！」

月奈「敦子、もう酔ってるの？」

敦子「酔ってるのはお酒じゃなくて、最近の

月奈によ」

月奈「ばかっ。てかマドンナって言い方古くない？ 今はヒロインとかセンターとか」

敦子「絶対にマドンナよ！」

敦子、月奈にヘルメットを被せる。

月奈、妙なポーズをする。

笑う敦子。

月奈、ヘルメットを脱いで。

月奈「いつも思ってたんだけど、このヘルメットってなんか味気ないよね。絵でも描こうよ」

月奈、ヘルメットに絵を描き出す。

敦子「異議なし！ 私たちノンセクトにもシンボリックなモノがあれば格好いいよね」

月奈「できた。じゃーん！」

下手くそな犬の絵。

敦子「なにそれ？ ニヤロメ？」

月奈「違うって。実家で飼ってる犬のベツカム。名前はベツカムだけど、ボストンテリアっていうアメリカ原産の犬なの。かわいいでしょ？」

敦子「アメリカのイヌ？ ナンセンス！」

月奈「だったらクリスマスだっていかにもアメリカ文化じゃん！ ナンセンス！」

敦子「うっ……」

楽しそうに笑う月奈。

○同・玄関（夜）

築かれたバリケード。

奥から笑い声が聞こえてくる。

丸山がタバコを吸っている。

沖田が松葉杖でやってきてタバコに火を付ける。

沖田「いかないのか？」

丸山「クリスマスとか、闘争において何になるって言うんですか」

沖田「おっ。たまには丸山も威勢のいいこと言うんだな」

丸山「アジって、デモって、ゲバ棒降り回して。こんなことばかりしてて、本当に闘争に勝利すると沖田さんは思ってますか？」

沖田「しこしこやっていくしかないだろ」

丸山「あの騒いでいるヤツらの中で、本気で社会を変えてやろうなんて思ってる連中はどれだけいますかね？」

沖田「さあな」

丸山「先週、あるセクトの集会に出てきました。そこではすでに武器を使用した闘争へと話が進んでいます」

沖田「はっ？」

丸山「武器があればもつと戦えるんです」

沖田「武装闘争はやめろ！ 巻き込まれた民衆に死者が出たら世論が離れていくぞ！」

丸山「死人ならとっくに出てるじゃないですか」

沖田「そうだけどな……」

丸山「結局、沖田さんは何がしたくてここに

来たんですか？」

沖田「えっ？」

丸山「貧乏学生の俺とは違って本当は闘争なんてしなくても沖田さんは将来が約束されてるのに。なんでここにいるんですか？」

沖田「……」

丸山、沖田を一瞥すると去っていく。

独り取り残された沖田。

陽気な合唱が聞こえてくる。

○同・集會室（夜）

パーティーが終わって散らかった会場。

酔いつぶれた敦子がソファで寝ている。

月奈、敦子を引っ張って。

月奈「敦子、部屋行くよ！ 起きて！ あつ、

機動隊だ！ パクられる！ 逃げろ！」

敦子「うーん……」

月奈「もう！」

沖田が入って来る。

月奈「あつ沖田くん！ ちょうど良かった！

敦子を部屋まで運ぶの手伝って」

沖田、残っている酒を見つけて飲む。

沖田「ここにいる連中の何人かは授業料値上げ反対って叫びながら、授業料払ってるって知ってるか？」

月奈「えっ？」

沖田「払わなきゃ除籍されて将来に影響するし、乱暴なイメージが付いた全共闘学生を採用したい会社なんてねえからな」

月奈「じゃあみんななんでここに？ もしか

して騒ぎたいだけ？ 違うよね？」

沖田「闘争勝利、闘争勝利……。何をしたら

俺たちの勝ちになるんだろうな」

月奈「沖田くん？ どうしたの？」

沖田「お前が前に言ったとおり、若者にはどうしようもできないことを俺たちはただわめいているだけなのかもな」

月奈「だったらもつと行動でしょ。私は沖田くんに誘われて自ら行動を起こしたことで、自分がここで必要とされていることに気が

付いたの。こんな事今までの人生で初めて。闘争が続くなら私は五十年後に帰れなくていい。ここでみんなと生きる」

沖田「お前、やっぱりバカだろ」

月奈「えっ？」

沖田「いつまでもこんなことやれるワケないだろ。いつか潰されて終わる」

月奈「ナンセンス！ 沖田くん、前に私に言ってくれたことと矛盾してるよ！ 私たちは無力じゃない！ もっと抗わないと！」

沖田「こんな状態でやれってか？」

自分のギブスを見つめる沖田。

月奈「治るまでは私が沖田くんの代わりに頑張るから！」

沖田「俺の代わりにか。そうだよな。俺の代わりなんてたくさんいるよな」

月奈「いや、そういうワケじゃなくて……」

沖田「月奈、教えてくれ。俺はこの世界に必要な存在か？」

月奈「えっ……」

去っていく沖田。

立ちつくす月奈。

○大通り

ジグザグデモが行われている。

月奈が外からデモ隊を見つめている。

その表情は暗い。

月奈「……」

敦子がやってくる。

敦子「月奈？ どうしたの？ アジもしないわ、デモにも出ないわ。おせちの残り物にあたったの？」

月奈「聞いちゃったんだけどさ、デモってる学生の中に学費をちゃんと払って復学できるようにしてる人がいるんだってね」

敦子「えっ？」

月奈「そう考えるところの大騒ぎもなんだかよく分からなくなっちゃって。みんなその時が来たらスーツ着て就活するんだろうね」

敦子「……」

月奈「先に帰ってるね」
去っていく月奈。
うつむく敦子。

○大学・経済学部棟・調理室（朝）

月奈と敦子がおにぎりを作っている。

月奈「最近ご飯作る量減ったよね」

敦子「年末年始に家に帰って、みんなそのまま居着いちゃったのよ」

月奈「そういえばずっと博子見ないんだけど知ってる？」

敦子「博子なら復学したみたい」

月奈「そっか……。博子も結局騒ぎたいだけだったのかな」

敦子「そんなことはないと思うけど」

月奈「まあ、自分の将来の方が大切よね」

敦子「……」

○同・集会室（朝）

月奈と敦子がおにぎりを持ってやってくる。

十人ほどの学生たちがテレビを食い入るように見ている。

敦子「何かあったの？」

テレビから流れる東大安田講堂の攻防。

敦子「うわぁ。始まったねえ」

月奈「これ知ってる……」

沖田がやってくる。

すでに松葉杖はついていない。

敦子「沖田くん！ 東大が……。何持ってるの？」

振り返る月奈。

沖田と丸山が鉄パイプを持っている。

月奈「えっ？ それって鉄パイプ？」

沖田「俺たちは東大の後方支援で沖田に向かう。行くヤツはすぐに用意しろ」

テレビには安田講堂から投げ落とされ、激しく燃える火炎瓶が写っている。

沈黙する一同。

沖田「日和り者が。やっぱりお前らの闘争は

「ごっこだったんだな」

月奈「沖田くん。ケガは大丈夫なの？」

沖田「自分の傷くらい自分で分かる。もういい。丸山いくぞ」

丸山「はい」

出ていく沖田と丸山。

呆然とする一同。

月奈「敦子、沖田くん神田って言ってたけど、どこのこと？ 大通り？」

敦子「……」

月奈「敦子？」

敦子「神田カルチェラタン」

月奈「カルチェラタン？」

敦子「解放区とも言われててね……」

○御茶ノ水駅前

信号機に掛かった「解放区」と書かれた看板。

炎に包まれている交番。

軒先が破壊された商店。

道路から剥がされ山積みになされた石。

ヘルメットに鉄パイプで武装して殺気

立った群衆。

○大学・経済学部棟・集会室（朝）

月奈、敦子。その他の学生たち。

敦子「あそこでやってることはもうデモなんかじゃない」

月奈「……」

月奈、部屋を出て行く。

○同・玄関（朝）

丸山がバリケードから出ていく。

続いて出ていこうとする沖田。

月奈がやってくる。

月奈「沖田くん、待って！ 私たちがしてることは世の中を良くしたいということだし、街を占拠して火炎瓶を投げるなんて、なんか違うって！」

沖田「ナンセンス！ 権力の暴力にはこちら

も暴力で立ち向かわないといけない。機動隊に催涙弾を投げ返していたヤツがどの口で言ってる！」

月奈「あれはあれでなんだかイラッて来たからで、これはこれよ！」

沖田「言ってることがメチャクチャだぞ」

月奈「鉄パイプに火炎瓶って、もうデモ隊じゃなくて暴徒じゃん！ 殺し合いよ！」

沖田「鬭争に流血は避けられない！」

月奈「そんなこと言うなら、いつそのことみんな鬭争なんてやめようよ！」

沖田「はっ？」

月奈「ねっ？ それだったら良いでしょ？

一緒にバリケード出てさ、他にやりたいこと探そう。勉強が嫌ならなんかスポーツでも趣味でも何でも良いから！ ねっ？」

沖田「月奈、俺は……」

京子の声「ナンセンス！」

月奈「えっ？」

京子がやってくる。

京子「沖田くん、早く行きなさい。今後、指導部に入りたいなら覚悟と結果を見せてもらうからね」

沖田「……。はい」

月奈「沖田くん！」

京子「月奈。これ以上鬭争の邪魔をするならあんたをここから追放する！」

月奈「自分の居場所は自分で決める。そう私は沖田くんから教えてもらった。京子さんの指示には従わないから」

京子「お前、マジで覚悟しておけよ」

去ろうとする沖田。

月奈が沖田の腕を掴む。

月奈「沖田くん……」

沖田「月奈、これは俺自身の存在のための行動なんだ。俺から鬭争を取ったら残るモノは何もない。やるしかないんだ」

月奈「あるって残るモノ。絶対にある」

沖田「……」

沖田、月奈の腕をふりほどいてバリケ

ードを出ていく。

月奈「沖田くん！」

追いかけようとする月奈。

敦子がやってきて月奈を止める。

敦子「月奈！　ここは抑えて！」

月奈「沖田くんは絶対に間違ってる！」

京子が月奈の前に立つ。

月奈、敦子を押しのけて京子の前へ。

月奈「どいて！」

敦子を押しのけようとするが、京子に押し返されて転倒する。

月奈「痛っ……」

京子「さてと。あんたがもしこのままここに残りたいって言うのなら、まずは闘争の邪魔をしたことについて自己批判してもらおうか」

月奈「私は間違っていない！　自己批判って意味分からないから！」

京子「そう。それなら今すぐここを出て行って！」

月奈「自分の場所は自分で決める！」

京子「出ていけ！」

敦子「京子さん、許してやってください！」

月奈には私からちゃんと闘争の意義を話しておきます！　月奈、お願いやめて。沖田くんのためでもあるの」

月奈「……」

京子「ふんっ」

去っていく京子。

月奈、京子がいなくなったのを見て、バリケードを出ていこうとする。

敦子「月奈。私、もうそろそろバリを出て、復学しようかと思ってるの」

月奈「えっ？」

振り返る月奈。

敦子が去っていく。

月奈「ちよっと待って！」

月奈、敦子を追いかける。

○御茶ノ水駅前

バリケードを挟んで機動隊と群衆が対峙している。
飛び交う怒号。
群衆の中には沖田と丸山がいる。

○大学・経済学部棟・女子部屋

月奈と敦子。

敦子「昔からね、小学校の先生になるのが夢だったの。でもさ、なんか卑怯だよ。結局は嫌ってた権力側の大人になるなんて」
月奈「違う。敦子は卑怯じゃない。昔からの夢なら立派よ！ ……なんて私に言わせたいの？」

敦子「ゴメン」

月奈「いいんじゃない。私みたいに将来何もやることが決まってるよりはマシよ」

敦子「月奈。私はバリケードを出てからも月奈と一緒にいたい」

月奈「うん」

微笑む月奈。

敦子にも笑みがこぼれる。

ふと月奈から笑みが消える。

月奈「……。沖田くんのは良いの？」

敦子「私には沖田くんがまぶしすぎるの。いつも何かに向かって一直線で突き進んでいく。そんな彼と、日和って復学なんかする私と一緒にいたら絶対にダメでしょ……」

布団に潜る敦子。

敦子「私は無力な人間だから、彼を助けてあげることなんてできない……」

泣き声が聞こえる。

月奈、布団の上から敦子をそっと抱きしめる。

月奈「敦子は無力なんかじゃない。体育会の大男にも敦子が最初に立ち向かったじゃん。でもね、一人で全部抱えてあげようとするのはダメ。私が半分抱えてあげる」

そっと部屋から出て行く月奈。

敦子、しばらくたってから月奈がいな
いことに気が付く。

敦子「月奈？ 月奈！」

○御茶ノ水駅付近・神田川

空気が催涙ガスで黄色く染まっている。
怒号と破壊音が聞こえる。

○御茶ノ水駅・駅前

激突する群衆と機動隊。

沖田が機動隊を蹴散らしている。

月奈が野次馬をかき分けてやってくる。

大きく燃えているたき火、飛び交うヤ
ジ、投げられ炎上する火炎瓶。

月奈、丸山を発見して駆け寄る。

月奈「丸山くん！」

丸山「月奈さん！ ナイス援軍です。サツの

野郎、結構しぶとくて」

月奈「沖田くんはどこ？」

丸山「沖田さん？ この混乱ですよ。分かり

ませんよ」

火炎瓶に火を付ける丸山。

月奈「ダメ！」

火炎瓶を機動隊に向けて投げる。

機動隊を巻き込んで燃え上がる火炎瓶。

丸山「やったぜベイビー！」

意気揚々と駆けていく丸山。

呆然とする月奈。

機動隊員の葛城明（21）が暴徒たち
に引きずり回されているのが見える。

月奈、暴徒たちの後ろにいる沖田を発
見する。

月奈「沖田くん！」

群衆をかき分けていく。

○同・路地裏

葛城が暴徒たちから暴行を受けている。

数名の機動隊員たちがやってくる。

機動隊員3「いたぞ！」

暴徒たちが機動隊にぶつかっていく。

一人になった葛城に沖田が近づく。
その手には鉄パイプ。

葛城「お、お前ら大学まで行ってこんなことして恥ずかしくないのか……」

沖田「お前こそ命令一つで民衆を押さえつけて、人として恥ずかしくないのか！」

葛城「俺だって家に金があれば大学に行つて勉強したかった」

沖田「はっ？」

葛城「俺からすればブルジョア批判するお前らがブルジョアだ」

沖田「だ、黙れ！」

沖田、葛城を蹴つ飛ばし鉄パイプを振り上げる。

月奈がやってくる。

月奈「沖田くん！」

沖田にしがみつく月奈。

沖田「月奈！ 邪魔だ！」

月奈を突き飛ばす沖田。

倒される月奈、すぐに起き上がり葛城を庇う。

沖田「どけ！ そいつを今から殺す！」

月奈「人殺しなんて絶対にダメ！」

沖田「鬭争における殺しは許される。お前に教えたはずだ！」

月奈「私は沖田くんに人殺しになつて欲しくない！」

沖田「どかないとお前ごとぶち殺すぞ！」

月奈「じゃあ殺してよ！」

沖田「えっ？」

月奈「そうしたらこのどうしようもない世界から五十年後に戻れるかも知れない。戻つてもどうしようもない世界には変わりないけど、沖田くんが人を殺した世界にいるよりはずっとマシよ」

沖田「月奈……」

月奈「それと、沖田くんのことを必要としている人はいるんだよ。この世界に」

沖田「……」

機動隊員たちが暴徒を捕らえている。

沖田を掴む機動隊員3。

沖田、機動隊員3をふりほどいて逃げ

ていく。

月奈「沖田くん！」

月奈、追いかけてようとするが機動隊員3に捕まる。

月奈「離して！」

抵抗する月奈を殴る機動隊員3。
気を失い連行されていく月奈。

○同・駅前

破壊された街。

機動隊員たちが信号機から「解放区」の看板を下ろしている。

○警察署・表

疲れ果てた月奈が数人の若者たちと一緒に署から出てくる。

表で待っていた人と再会を喜ぶ若者。

月奈には誰も来ない。

月奈「……………」

敦子の声「月奈！」

月奈「えっ？」

敦子が駆けてきて月奈を抱きしめる。

月奈「敦子……………」

敦子「もう！心配したんだよ。三週間も捕まっちゃって。乱暴されてない？」

月奈「それは大丈夫。中では他の人たちがワ

ンワン騒いでて、おとなしくしてた私なんて見向きもされなかったから」

敦子「良かった……………。てか臭い！」

月奈「えっ？」

月奈、自分を嗅いで顔をしかめる。

○敦子のアパート・外観

木造の建物。

○同・室内

六畳の部屋。

隅には段ボールが積まれている。

風呂上がりの月奈が入って来る。

敦子がいる。

月奈「いやあ。ここはバリと違ってお風呂があつてたばこ臭くないし最高ね」

敦子「神田の後、またバリケード破りがあつてね。今度は人が少なかつたから、あつという間にやられちゃつたの。何人かは別の場所に移つたけど、私はバリを出てここ借りることにして」

月奈「もう闘争も終わりが近いのかもね」

敦子「月奈。私、大学に戻って、ちゃんと勉強して教師なるって決めたから」

月奈「うん。頑張つてね」

敦子「まあ、そう両親に頭下げて話したからここ借りられたんだけどね」

月奈「……」

敦子「……」

月奈「沖田くんは？」

敦子「……。神田の後、沖田くんも丸山くんもバリには帰つてこなかつたの」

月奈「留置所でも見かけなかつたし、違う拠点にでも行つたのかな？」

敦子「家に帰つたとか」

月奈「ありえるかも！ 連絡しよう！ って、

ケータイなんてないか……」

敦子「沖田くんの実家まで行こうか」

月奈「実家知つてるの？」

敦子「知らないけど、調べるよ」

月奈「調べるって、この時代のテクノロジーじゃムリだよ」

敦子、電話帳を取り出す。

月奈「何コレ？」

敦子「えっ？ 電話帳だけど？」

電話帳を開く敦子。

個人名、電話番号、住所が並んでいる。

月奈「こ、個人情報が……」

敦子「沖田沖田……」

ページをめくる敦子。

月奈「でもさ、沖田さんなんていっぱいいるでしょ？ しらみつぶしに電話するの？」

敦子「そんなことしなくても大丈夫よ。だって沖田くんの実家はね……」

○沖田外科医院・前

立派な二階建ての個人病院。
月奈が安然として見上げている。

○同・玄関前

「休診」の看板。

月奈、ドアを叩く。

月奈「すみませーん！ すみませーん！」

中から沖田徹（28）が顔を出す。

徹「なに？ 急患？」

月奈「沖田くんいます？ 茂くん。私、大学

で一緒だった本橋って言います」

徹「全共闘か？」

月奈「はい」

徹「帰れ！ そんなヤツうちにはいない」

月奈「えっ？ で、でもここ沖田くんの家で

すよね？」

徹「帰れ！」

ドアを閉める徹。

月奈「なによ……」

月奈、深呼吸をするとお腹を押さえて。

月奈「痛い痛い痛い！ 先生！ 助けて！

死んじゃうよ先生！ うわあああ！」

月奈の声で近所の人が集まり出す。

月奈、さらに大きな声で。

月奈「ああああ！ 助けて先生！」

ドアが開く。

月奈「痛いよお！」

月奈、素早く中へ入る。

○同・内

入って来る月奈、ケロッとして。

月奈「ありがとうございます！ あれ？」

沖田がいる。

月奈「沖田くん……」

沖田「ちよつと新宿まで付き合え」

○新宿駅西口広場（夜）

フォーキング集会が行われている。

ギター片手に歌う歌手たちを学生やサラリーマンなどが取り巻いている。
月奈と沖田が見ている。
歌い終わった歌手に拍手が贈られる。
楽しそうに笑顔で拍手をする月奈。
拍手をせず硬い表情の沖田。
沖田を見て、月奈の笑顔が消える。

○路上（夜）

月奈と沖田が歩いている。

沖田「本当だったら、俺は歌ってる側に行きたかった。人前でしゃべられる根性があればだけど」

月奈「ただのあがり症でしょ？ 何でも根性っておかしいから。家が医者なのに病気も根性で治すわけ？」

沖田「月奈、俺があんなブルジョアの家で幻滅しただろ」

月奈「医学部だったんだね、沖田くん。幻滅なんてしないよ。生まれる時代と家は選べないワケだし」

沖田「学費値上げ反対って叫んでもうちは払える余裕あるし、インターンもどうでもいい。なんでもいいから俺が医者になれば家族はそれでいいと」

月奈「さっきの人はお兄さん？」

沖田「ああ。学生運動のことは人一倍毛嫌いしててな、次はないと言われた」

月奈「沖田くんも医者になるの？」

沖田「強制されて医者になるのが嫌だから、家が嫌がる学生運動をしてたんだ。月奈、神田のあの機動隊員覚えてるか？」

月奈「う、うん」

沖田「あいつ、大学に行った俺のことをうらやましやがって。金があれば自分も大学で勉強したかったと。俺は大学に行きたくて行ったわけじゃねえのに」

月奈「そんなこと言って仕方なく医者になった人に、私だったら自分の体を看てもらいたくないな」

沖田「医者以外に将来やることなんて一つもねえよ」

月奈「やりたいこと探してないだけでしょ？それでやりたいことがないなんて言わないでよ」

沖田「……」

月奈「まあ、私もただだね。自分のやりたいことなんて分からないまま就活してさ。そりゃ何十社も落ちるわけだよ」

沖田がタバコに火を付けようとする。

月奈、沖田から少し離れる。

沖田「……」

タバコをしまう沖田。

沖田「月奈。月奈がいたって言う五十年後の世界の話をしてくれないか？」

月奈「話したって信じてくれないでしょ」

沖田「今度はとりあえずは信じる。笑ったりはしない。月奈がウソを付く人間じゃないってことはもう分かってる」

月奈「……」

沖田「俺たちの世代が次の世代に何を残したのか、それを教えてくれ」

月奈「そう言われても何から話せば……」

沖田「そうだな……」

上を見上げる沖田。

月が輝いている。

沖田「そうだ。人類は月に行けたのか？」

月奈「月？ とっくの昔に行けたわよ。確かアポロ十何号だからそろそろだと思っ」

沖田「おお！ じゃあ火星には行けたか？」

月奈「まだ行ってないよ。地球の近くを回ってる宇宙ステーションで精一杯なの」

沖田「宇宙ステーション！ すげえなそれ」

月奈「確か日本、アメリカ、ロシアとかが協力して作ってるの」

沖田「ロシア？」

月奈「あっ、ソ連なら崩壊するよ。理由忘れたけど」

沖田「待って待って！ ソ連が？ そんなことがありえるのか！」

月奈「うん。ありえたみたい」

沖田「三島はノーベル賞取ったか？」

月奈「三島つて三島由紀夫？ 取ってないよ。切腹しちゃたから」

沖田「せ、切腹？ なんで？」

月奈「さあ？ てかこんな話で良かった？

あとは私が生きてきた平成つて時代の話すると、災害とか本当につらい話ばかりになるの」

沖田「それが俺たちの未来つてことか……」

月奈「でもさ、こんな話しても前提としてタイムスリップなんて信じてもらえないよね。そんなことありえないワケだし」

沖田「月奈、人類は月に行けたんだろ？」

月奈「うん。行けたよ」

沖田「それならさ、タイムスリップくらいできらんじゃねえの？」

月奈「えっ？」

沖田「月に行くのだって夢の夢だったのに、人類はそれを叶えたんだろ？」

月奈「確かに。そうかもね」

微笑む月奈。

沖田が月を見上げる。

沖田「人類は月に行くつて言うのに、俺たちは何してるんだらうな」

月奈「……」

月を見つめる月奈。

○敦子のアパート・室内（夜）

敦子が机に向かって勉強をしている。気が散って全く進んでない様子。

ノックの音。

笑顔になる敦子。

敦子「はい！」

鏡で髪と服を整える。

敦子「よしっ」

敦子、玄関のドアを開ける。

敦子「おまたせ……。えっ？」

○路上（夜）

月奈と沖田が歩いている。

沖田「敦子と呼んでるって。あいつもお前と

一緒に来れば良かったのに」

月奈「復学して勉強に忙しいって言うから、

私が一人で沖田くんちに行ったの。まあ、

なんとなく恥ずかしいだけでしょ」

沖田「何が恥ずかしいんだ？」

月奈「えっ？　もしかして気が付いてなかつ

たの？」

沖田「だから何がだ？」

月奈「鈍感すぎる！」

窓ガラスが割れる音が響く。

月奈・沖田「？」

前方にあるアパートの窓ガラスが割れている。

沖田「なんだ？　ケンカか？」

月奈「……。あそこ、敦子の部屋……」

沖田「！」

駆け出す月奈と沖田。

○敦子のアパート・室内(夜)

敦子が男2に襲われて必死に抵抗している。

○同・玄関前廊下

月奈と沖田がやってくる。

月奈「敦子！」

ドアを開ける月奈。

沖田「待て！」

中から顔をタオルで隠した男3が現れ、

月奈に向かって鉄パイプを振り下ろす。

月奈「へっ？」

月奈を引っ張る沖田。

空を切る鉄パイプ。

沖田、男3と取っ組み合いになる。

沖田「クソッ！　なんだお前ら！」

月奈「敦子！」

部屋に駆け込む月奈。

沖田「行くな！」

沖田、月奈を止めようとするも男3が

離さない。

○同・室内(夜)

入って来る月奈。

月奈「敦子！」

男2が敦子を盾にして月奈と対峙する。

敦子「月奈！ うっ！」

男2が敦子を絞める。

月奈「敦子！ そいつの足を思いっきり踏んで！」

敦子「えっ？」

月奈「こんなときの対応ってのは、平成じゃテレビとかで飽きるほど見させられてるのよ！」

敦子、男2の足を踏もうとするが避けられる。

男2「お前バカだろ？ こっちにも聞こえてるんだよ」

敦子が男2の足を踏もうとする。

また避ける男2。

月奈が迫り、敦子と同時に男2の足を踏もうとする。

男2「えっ？」

避けきれずに月奈の一撃を食らう男2。

男2「ぎゃあ！」

敦子が男2から離れる。

敦子「月奈！」

月奈「大丈夫？」

敦子「うん」

男2「てめえら……」

男2が鉄パイプを手に二人に迫る。

敦子「こ、この場合はどうするの？」

月奈「……。分からない」

敦子「えええ！」

鉄パイプを振りかざす男2。

身構える月奈と敦子。

鈍い音が響き、男2が倒れる。

鉄パイプを手にした沖田がいる。

沖田「敦子！ ケガはないか？」

敦子「うわああん！ 沖田くーん！」

沖田に抱きつく敦子。

沖田「大丈夫そうだな。とりあえずここを出るぞ！ 仲間が来るかも知れん！」

月奈「うん」

○路上（夜）

駆け足の月奈、沖田、敦子。

月奈「誰？ あの人たち」

敦子「知らないわよ。急に入ってきて……」

沖田「内ゲバだ」

月奈「内ゲバ？」

沖田「最近対立するセクト同士のつぶし合いが増えている。それに巻き込まれたんだ」

月奈「それだったら敦子は関係ないじゃん。」

もう運動やめてるし、元々ノンセクトでしょ？」

沖田「じゃあ狙いはお前かもな」

月奈「えっ？ なんで？」

沖田「セクトのリーダーとか、あとはデモで目立つヤツが真っ先に狙われるんだ」

月奈「そんな……。いくらなんでもそれだけで襲われるなんて」

沖田「まったくだな。人類から戦争がなくないわけだ」

敦子「これからどうするの？」

沖田「とりあえず丸山に世話になろう」

○丸山のアパート・玄関（夜）

古い木造建て。

ドアを開ける丸山。

月奈、沖田、敦子がいる。

丸山「えっ？ 三人揃って何事ですか？」

沖田「一晩隠してくれ。内ゲバで狙われた」

丸山「内ゲバ？」

沖田、部屋に入ろうとする。

丸山「待ってください！ しばらく会ってなかったのに、急に来られても困ります」

沖田「こっちは殺されかけたんだぞ」

丸山「で、でも……」

室内をチラッと見る丸山。

切れ込みの入った鉄パイプが布団の下から見切れている。

沖田が丸山を押しつけて入っていく。

丸山「あっ！」

○同・室内（夜）

四畳半の部屋。

沖田が布団をめくってあ然とする。

短く切った鉄パイプがいくつもある。

丸山、月奈、敦子がやってくる。

月奈「何これ？ D I Yでもしてたの？」

沖田「キューリか……」

月奈「私にはゴージャに見えるけど」

沖田「鉄パイプ爆弾だ」

月奈「爆弾？ ひっ！」

後ずさりする月奈と敦子。

沖田「丸山、お前……」

丸山「今までのやり方じゃダメなんですよ。

これからは爆弾と銃による殲滅戦が必要になってきます」

沖田、丸山の胸ぐらを掴む。

沖田「殲滅戦って、戦争でもやる気か！」

丸山「沖田さん、俺にもやっとな自分が生きる

場所がみつかったんです」

沖田「はっ？」

丸山「どこに行っても何やってもダメで、誰からも認められない俺を連中は同士だと言ってくれたんです」

沖田「……」

丸山「党の活動の邪魔をするなら沖田さんでも容赦しませんから」

沖田「そうか……」

丸山から手を離す沖田。

沖田「良い仲間に出逢ったんだな」

丸山「えっ？」

沖田「大学の中庭の端っこで独り飯を食っていたお前をオルグした時を思い出した。バリケードの中でも、お前は俺以外とはあまり話をしてなかったから」

丸山「……」

沖田「革命、頑張れよ。お前みたいに純粹なヤツならできるかも知れないな」

出ていく沖田。

慌てて追いかける敦子。

月奈「丸山くん。よく分らないけどさ、人を傷つけることをする仲間から逃げることは立派な勇気なんだからね」

去っていく月奈。

丸山、独りになると堰を切ったように泣き崩れる。

○路上(夜)

月奈、沖田、敦子が力なく歩いている。

敦子「丸山くん、大丈夫かな？」

沖田「自分の存在が認められる場所を見つけられたんだ。それでいいじゃねえか」

月奈「……」

敦子「そうだ。沖田くんち行かない？ 少し距離あるけど、私ご両親に……」

沖田「うちの家族が元全共闘の女二人を家に入れるわけないだろ」

月奈「うん。門前払いされるよ」

敦子「じゃあ、どうする？」

沖田「……」

○大学・校門(夜)

月奈、沖田、敦子が入っていく。

○同・経済学部棟・玄関(夜)

月奈、沖田、敦子が出てくる。

月奈「やっぱりここしかないのね」

崩れかけているバリケード。

沖田「誰もいないのか？」

敦子「二人がいない間にバリケード破りがあったの。残った人は確か三号館にいる」

沖田「よっし。そっちに行くか」

京子がやってくる。

京子「何してるのあんたたち？」

沖田「京子さん！ 内ゲバです！ 俺たち、やられかけました」

京子「えっ？」

沖田「とりあえず今晚はバリの中で休ませて
ください」

京子「沖田くんはまあ良いとして、そっちの
二人はもう追放してるんだけど」

月奈「追放って。そんなこと聞いてない！」

京子「神田に行くなって言ったのに勝手に
行ってパクられたんだから当たり前でしょ。

敦子は復学したわけだし」

沖田「京子さん、お願いです」

頭を下げる沖田。

京子「……。仕方ないわね。みんながいる三
号館はいっぱいだから、こっちで寝て。布

団は人が減った分まだあると思うから」

沖田「ありがとうございます」

京子「バリどかすの手伝って」

沖田「はい」

沖田、京子と共にバリケードの残骸を
片付ける。

沖田「内ゲバって言っても、相手に全く覚え
がないんですね」

京子「そっちは覚えあるんじゃない？」

月奈「……」

沖田「ないと言ってますよ」

京子「そう。やっぱりあの子、ただのバカだ
ったわね」

月奈「えっ？」

沖田の背後に迫る影。

月奈「沖田くん！」

沖田「？」

鉄パイプで殴られ倒れる沖田。

敦子「きゃあああ！」

京子「ブルジョアの家でおとなしくしてれば
良かったのに」

京子の周りに顔をタオルで隠した数人
の男たちが集まってくる。

その手には鉄パイプ。

京子「さて本橋月奈。指導部の指示に従わな
いで勝手な行動ばかりしていたことを自己
批判してもらうか」

月奈が震える敦子を庇うように立ちはだかる。

月奈「卑怯者！ 狙うなら私だけ狙えばいいじゃない！」

京子「留置所入っておとなしくなるかと思つたら、相変わらずムカツクわね。元々は下っ端のクセに」

月奈「いつも上から目線で偉そうに！ あんたみたいな人間が年をとったら、老人を敬えとか言つて若者をいじめめるのよ！ 敬われたかつたらそれだけの大人になれつて！ そつちが決めたことなのにゆとりはダメだとか、俺たちの若い頃はもつと大変だったとか好き勝手言つて！ そんなことばかり言う人間が自分たちが怒りの矛先を向けていた汚い大人たちのようなものよ！ 恥を知れ！」

京子「ババアみたいに説教するな！ 片付けて！」

鉄パイプの男たちが月奈と敦子に迫る。逃げられそうにない月奈と敦子。迫る男たち。

にやける京子。

丸山の声「おい！」

声に振り返る一同。

暗闇から丸山が現れる。

月奈「丸山くん！」

丸山、鉄パイプ爆弾を持っている。

京子「えっ？」

爆弾に火を付けようとする。

京子「待つて待つて待つて！」

丸山「沖田さんから離れろ！」

沖田から離れる京子と男たち。

京子「丸山くん？ その爆弾は権力に向ける物よ。ここで使うなんてナンセンスよ」

丸山「俺の大事な人を傷つけた相手に使うんです。許される行動だと自分は考えます」

爆弾に火を付ける丸山。

一目散に逃げ出す鉄パイプの男たち。

京子、逃げようとするも男たちが落と

した鉄パイプを踏んで転ぶ。

丸山が京子の目の前に爆弾を転がす。

京子「ひゃあ！」

伏せる月奈、敦子。

が何も起こらない。

月奈「ん？」

火が消えている爆弾。

京子「へっ？」

丸山「火薬は入ってないですよ。俺、もう闘争辞めましたんで」

敦子、慌てて沖田の元へ駆け寄り、沖田の傷の手当を始める。

敦子「沖田くん、しっかりして！ 今度は私が沖田くんを助けるから！」

沖田「ああ」

京子が崩れかけたバリケードを越えて中へと逃げていく。

月奈「ああ！」

月奈が京子を追いかける。

敦子「月奈！ 丸山くん、月奈を止めて！」

丸山「ムリだ。さっきの連中が戻ってきたらマズイ」

敦子「月奈……」

○同・廊下（夜）

逃げる京子を月奈が追う。

京子が教室に入っていく。

○同・教室（夜）

メチャクチャに破壊されている室内。

月明かりが差し込んでいる。

月奈が入って来る。

誰もいない。

月奈「……」

京子が奥にある机の下に隠れている。

ゲバ棒を握りしめる京子。

京子に気が付いてない月奈。

京子、じつと機会をうかがっている。が何も音がしなくなる。

京子「？」

机の下から出てくる京子。

離れた所から月奈が見ている。

京子「！」

月奈「隠れて待ち伏せして襲うとか、ありきたりなうえ古すぎるから。それに京子さん短気だから、すぐに出てくると思ったし」

京子「うわあああ！」

京子、ゲバ棒で月奈を襲う。

素手に対する月奈、あつというまに京

子からゲバ棒を奪う。

京子「ひっ！」

月奈「こっちは機動隊と何度やってると思ってるの？」

後退する京子、落ちていたコンクリー

ト片を月奈に向かって投げる。

月奈の頭部に当たる。

京子「やったぜベイビー！ えっ？」

月奈、ひるまずに京子へ向かっていく。

京子「待って！ そのゲバ棒は権力に向けるモノでしょ？ ナンセンスよナンセンス」

月奈「ナンセンス、ナンセンスって。横文字使えば格好いいって思ってるわけ？」

京子「えっ？ いやあ……」

月奈がゲバ棒を京子に突きつける。

京子「ひっ！」

月奈「自己批判しなさい」

京子「へっ？」

月奈「敦子を怖い目に遭わせて、沖田くんを傷つけ、私を殺そうとしたことを自己批判しなさい！」

京子「……」

月奈「自己批判しなさい！」

ゲバ棒を京子の喉元に突きつける。

京子「わ、私は新入りの月奈がアジで急に人気になって一部からはマドンナだってチャホヤされていたことが気に入らなくて、内ゲバに見せかけて闘争資金で雇ったチンピラに月奈の襲撃を頼んで。で、でも痛み付けるだけで殺しはしないで……」

月奈「言い訳なんかしないで最後まで自己批

判しなさい！」

京子「こ、個人的な感情から本来の闘争の目的を逸脱して勝手な行動をしてしまったことを自己批判します！」

月奈「ダメ、全然自己批判できてない」

京子「えつと……。その……」

月奈「自分が分かってないクセに人に自己批判しろとか言ってたの？」

京子「うっ……」

月奈「ねえ。京子さんは何になりたくてこんなことしてたの？」

京子「えっ？」

月奈「これからどんな大人になりたいかって聞いているの」

京子「……」

月奈「時代の空気とかかっこいい言葉に流されてバリの中に来たはいいけど、結局あんたも自分が何になりたいのか見つけることができてなかったんだ」

ぐったりと力が抜ける京子。

月奈、ゲバ棒を放り投げて去っていく。

○同・玄関（夜）

鉄パイプの男たちが倒れている。

息を切らしている丸山。

沖田が敦子の支えて起き上がる。

沖田「結構チョロそうだったな」

丸山「守る仲間がいない人間は弱いんです」

沖田「格好つけるな」

微笑む沖田。

バリケード内から音がする。

身構える三人。

月奈の声「おーい」

敦子「月奈！」

バリケードの隙間から月奈が見える。

丸山「ちよつと待ってくださいね。すぐにバリ

リどかしますから」

月奈「いいって。自分でやるよ」

月奈、壮大に音を立ててバリケードを崩し始める。

あ然と見ている沖田、敦子、丸山。
顔を見合わせると三人もバリケードを
崩し始める。
バリケードをメチャクチャに破壊して
いく月奈たち。

○同・表（夜）

月奈、沖田、敦子、丸山が出てくる。
頭を抱えてうずくまる沖田。

沖田「痛ててて……」

敦子「もう！ ケガしてるのにバリ崩しなん
てするからこうなるのよ！ バカ！」

丸山「救急車呼んできますから、待っててく
ださい！」

駆けだしていく丸山。

月奈「沖田くん……」

沖田「大丈夫だ。そういえば京子さんほ？」

月奈「ケチョンケチョンしてきた。でも乱
暴なことはしてないから心配しないで」

沖田「それ、逆に怖いな……」

ニヤリと微笑む月奈。

月奈「ん……？ 痛い……」

頭を抑える月奈、急に苦しみ出す。

沖田「どうした？」

月奈の手に血が付いている。

沖田「お前やられてるんじゃないか！ 敦子、
月奈の分も救急車だ！」

敦子「うん！」

走っていく敦子。

倒れ込む月奈を支える沖田。

沖田「月奈！ しっかりしろ！」

月奈「この感覚アレだ……。沖田くん、私こ
こからいなくときが来たんだよ……」

沖田「はっ？」

月奈「きつとこの世界で私は必要じゃなくな
ったんだ。だからまた別の世界に行くの」

沖田「何言ってるんだ！ 月奈、お前は俺を
救ってくれた。お前がいたから俺は今ここ
にいられるんだ！ 必要じゃないわけない
だろ！」

さらに苦しむ月奈。

沖田「月奈！」

月奈「沖田くんに出会えて良かった。敦子にも丸山くんにも……」

沖田「月奈！　しっかりしろ！」

月奈の体を光が包み出す。

月奈「沖田くん、さよなら」

沖田「月奈。お前と一緒にいて一つ気が付いたことがあるんだ！」

月奈「？」

沖田「人類は月に行けたんだろ？　だったら俺たちだって！　俺たちだってなっ！」

月奈の体が光に包まれる。

× × ×

敦子と丸山がやってくる。

敦子「今、救急車呼んだ！　あれ？」

沖田が独り地面に座っている。

敦子「月奈は？」

沖田「……。月に行ったのかもな」

敦子「えっ？」

空を見上げる三人。

月が輝いているのが見える。

○大学・キャンパス内・現代（朝）

月奈が倒れている。

警備員の真野一雄（62）が月奈を揺さぶっている。

真野「どうした！　しっかりしなさい！」

目を開ける月奈。

真野「大丈夫か？」

月奈「ここは？」

真野「飲んでるの？　学内は飲酒禁止だよ」

目の前には真新しい建物が並んでいる。

月奈「……。今年って何年ですか？」

真野「はっ？　2018年だけど？　それがどうかしたの？」

月奈「戻ってきたんだ……」

堪えきれずに泣き出す月奈。

戸惑う真野。

月奈、しばらくは泣き止みそうにない。

○同・図書館

月奈が学生運動の書籍を読んでいる。

月奈M「現代の時間で数日間、私は五十年前の世界で数ヶ月を過ごしたようだ」

本には神田カルチェラタン闘争やバリケード内の写真が載っている。

月奈M「学生運動はその後過激化が進み、若者たちはお互いを傷つけあった挙げ句、数年で沈静化した」

大きくため息を漏らす月奈。

スマホで「沖田茂」と検索。

画面に「沖田茂」が並ぶが、どれも沖田ではない。

○沖田外科医院跡

閉鎖された建物。

月奈が呆然と立ちつくしている。

月奈M「あの時の彼らがその後どんな人生を歩んだのか、私には知る術がなかった」

○とある会社・会議室

リクルートスーツを着た月奈を含めて、五人の若者がグループディスプレイションをしている。

ホワイトボードに「課題 グローバルな商品とは？」と書いてある。

柴田宏幸（22）が他の就活生をよそに独りで喋っている。

柴田「てか世界を見てない人間にグローバルを語ることはできないと思いませんか？」

あきれて聞いている面接官たち。

苛立ちを必死に抑えている月奈。

柴田「僕は学生団体で行った東南アジアでのボランティア経験を通して貧しい子供たちを見てきたので分かるんです。グローバルって肌で感じるモノですから。それをみなさんは分かってますか？ 分からないですよね？」

月奈、我慢の限界。

月奈「ナンセンス！」
一同「？」

月奈「現代はネットを通して世界の情報はいくらでも集まるし、海外経験の有無なんて人間性や能力性にとって全く関係ない！」

あっけにとられている一同。

月奈「てか、課題からズレてただの過去自慢になってるし。結局のところ、あなたはこれから何がしたいんですか？」

柴田「うっ……」

月奈「これだから意識高い系は……」

月奈、周りが引いている事に気が付く。

月奈「私も一緒だ……。将来何をしたいのかわからない不安のせいで、楽しかった過去に取り憑かれている」

力なくうつむく月奈。

○大学・食堂

スマホ画面に写る「不採用メール」。

月奈が履歴書を書いている。

月奈の後ろに莉子と美咲がいる。

莉子「聞いてよ！ こないだ内定者の集まり行ってきたんだけどマジありえないの！」

美咲「莉子、ジュエリーの会社だっけ？」

莉子「そう。で、その女の社長がさ、もうババアなんだけど、一代で会社をデカくした話を偉そうにずっと演説しちゃってさ。ネット見たら相当ブラックな噂があるの」

美咲「内定なかなかもらえてなかったからって完全に慌てたわね。また就活する？」

莉子「もう二月よ。ムリだった。それとそのババア社長、昔学生運動してたらしくて」

月奈「？」

美咲「学生運動ってあのなんとか反対ってヘルメットかぶって木の棒降り回してる？」

莉子「全共闘って言うんだっけ？ 綿引京子で検索して見なよ。悪口だらけだから」

美咲「うわっ。おっかない」

月奈、履歴書をクシヤクシヤにする。

○ジュエリーキョーコ本社・表

都心にある大きな自社ビル。

京子（73）がビルから出てくる。

佐伯次郎（50）と吉川美羽（25）が追ってくる

佐伯「綿引社長、この度は本当に申し訳ございませんでした。吉川も深く反省しておりますので……」

美羽「……」

佐伯「吉川！」

美羽、不服ながらも頭を下げる。

美羽「申し訳ございませんでした……」

京子「頭下げれば許されると思ってるの？」

先方からセクハラされたくらいになによ！

契約をすっ飛ばしちゃって！ セクハラは

あんたの勘違いよ！ いちいち喚くな！

美羽の目から涙がこぼれている。

京子「すぐに泣く！ これだから最近の若者

は！ 私が若い頃はもつとしっかりしていたわよ！」

北村咲良（23）が影に隠れて京子を

カメラで撮影している。

京子の前に立つ月奈が見える。

咲良「ん？」

月奈の手には角材。

京子、月奈に気が付いて。

京子「何？」

月奈「最近の若者はこれだからっていう大人

になっちゃったね。京子」

京子「だ、誰よあんた！」

月奈、京子に角材を突きつける。

京子「ひっ！」

月奈「自己批判しなさい」

京子「えっ……？」

月奈「自分が若いときにあれほど嫌っていた権力を自分が使うようになって不正を必死

に訴える若者を押さえつけている行為に対

して、今ここで自己批判しなさい！」

京子「そ、そんな……。あんたまさか……」

月奈「京子！」

月奈、京子の喉元に角材を突きつける。
腰を抜かす京子。

京子「も、本橋月奈なの？　なんで？」

月奈「自己批判しなさい！」

京子「ひいひい！」

咲良が月奈を止めに入る。

咲良「理不尽に暴力で返したらダメ！　あなたの人生が終わるだけよ！」

佐伯「社長！」

佐伯が京子を引きずるようにビル内へ逃げていく。

美羽、月奈に深く頭を下げて去っていく。

月奈「若者なんて所詮無力か……」
立ち去る月奈。

○路上

月奈が歩いている。

後ろから咲良が追ってくる。

咲良「あの、決して無力じゃないですよ」

咲良が月奈に名刺を差し出す。

名刺には「週刊真相　記者北村咲良」と書かれている。

咲良「週刊真相の記者をします北村と申します。現在、綿引京子社長のパワハラ疑惑を追ってます」

月奈「私は会社とは関係ないですよ」

咲良「えっ？　社員とかじゃないの？　もしかして学生？」

就活で変なコトされた？」

月奈「ややこし過ぎて言いたくないです」

咲良「ぜひ聞かせてください。あの社長、噂はたんまりあるけど確証が少なくて。昔いた全共闘のことはベラベラ喋ってるらしいのに。てか全共闘なんて今の子は知らないよね」

月奈「知ってますよ。うんざりするくらい」

咲良「珍しいわね。私は祖父母からたまに話を聞いてたから多少知ってるけど、さっぱり彼らが理解できなかったわ」

月奈「祖父母？　全共闘にいたんですか？」

咲良「うん。そこで二人は出逢ったらしいから。全共闘って危ないイメージあるけど、二人は面白い人よ。おじいなんて家が代々医者だから医者にはなったけど途中で辞めちゃって、それから変なことをずっと研究してたんだから。笑っちゃうよ」

月奈「変な研究？」

咲良「時空を超える研究。つまりタイムスリップ」

月奈「タイムスリップ？」

咲良「そう。でも私はそういう自由な感じのおじいが好きでさ、好きなことをすれば良いつて言ってくれたから親の反対押し切ってこんなコトしてるの。本当は芸能でイケメン追いたいんだけどね」

月奈「あの……。その人の名前は？」

咲良「イケメンの？」

月奈「タイムスリップの研究をしていた方」

咲良「えっ？ 興味あるの？」

月奈「教えてください！」

咲良「そんななどならないでって。沖田茂って言うのよ。別に有名人じゃないよ」

月奈「沖田くん……」

咲良「でも、本当にいい人だったなあ」

月奈「だった？」

咲良「先週亡くなったの」

月奈「えっ？」

咲良「でもいい顔してたよ。苦しむことなく、何かやり遂げたって感じでさ」

月奈「……。沖田くんが私を過去に？」

○（回想）新宿駅・ホーム（夜）

月奈が線路に落ちていく。

閃光の後、電車が線路を通り過ぎる。

騒然となる人々。

ベンチに座る老人、沖田（72）。

沖田「月奈……」

その表情は涙を堪えながらも、どこか笑っている。

○路上

月奈、咲良。

月奈が涙を流している。

咲良「えっ？」

月奈「過去に送るならもっと良い時代に送れ
って。暴走老人が」

咲良「？」

月奈「あれ？ 沖田くんの妻って……」

○老人ホーム・外観（夜）

海辺に立つ建物。

○同・個室内（夜）

車いすに座り、窓から外を眺めている

老婆がいる。

月奈と咲良が入って来る。

咲良「おばあ。来たよ」

月奈「……。敦子？」

敦子（71）が振り返る。

敦子「ああ、月奈！」

駆け寄る月奈、敦子を抱きしめる。

敦子「なんで突然いなくなったのよ！」

月奈「うん。ごめん」

敦子「今、沖田くんデモに行ってるの。もう
すぐ帰ってくると思うから、ご飯作って待
ってようね」

月奈「うん」

咲良、月奈に耳打ち。

咲良「ちよつとボケが来てて、昔のこととか
たまに変なこと言うの」

月奈「大丈夫よ。だって敦子だもん」

咲良「？」

敦子「私、あのあと自分から沖田くんに交際
をお願いしたんだからね」

月奈「そうなの？ やるじゃん！」

敦子「それから私は小学校の教師になって、

沖田くんは医者になって結婚して」

月奈「沖田くんと的人生はどうだったの？

幸せだった？」

屈託のない笑顔で答える敦子。

月奈「良かった。私も頑張らないといけないな。実はまだ自分が何になりたいのか、見つけられなくてね……」

敦子が机の引き出しを指さす。

月奈「なに？」

引き出しを開ける月奈。

全共闘運動を写した写真集が出てくる。

咲良「まだそれ持ってたの？ その本を周りに見せびらかすから、みんなひいてるんですよ。なんか危ない人たちだって」

月奈「実際の彼らは将来どんな大人になろうかもがいていたただの若者です。今の私たちと変わりなんてありませんよ」

敦子があるページを開く。

覗こうとする月奈。

敦子が遮る。

敦子「やっぱりダメ。見せない」

月奈「なんでよ。何があるの？」

敦子「月奈も沖田くんのこと好きでしょ？ 私、獲られたくないの」

月奈「敦子。私は友達好きな人を奪うことなんて絶対にしない。50年前にも言ったでしょ？」

微笑む敦子、月奈に本を差し出す。

開かれたページには、バリケード内の落書きの写真が載っている。

月奈「なに？ 私が書いたベツカムでもいるの？ ……。えっ？」

「L奈 君にまた会えたら伝えたいことがある。人類は月に行けたんだ。俺たちだって何にでもなれる」と壁に書かれた落書きの写真。

咲良がのぞき込んでくる。

咲良「俺たちだって何にでもなれるか。なんか世間知らずの若者って感じね」

窓の外を見る月奈。

月が輝いているのが見える。

月奈「そうだよ、沖田くん。私たちは何にでもなれるんだよね」

笑みがこぼれる月奈。

〈終〉